

科技高 いきもの記

Vol.47 2022.3.16

生物教員 佐藤龍平

さわれる？さわれない？ 春のカエル観察会



猿江公園のアズマヒキガエル カエルを“お座り”させる。サキはカエルを“可愛がる派”で、カワイイ～と連呼していた。

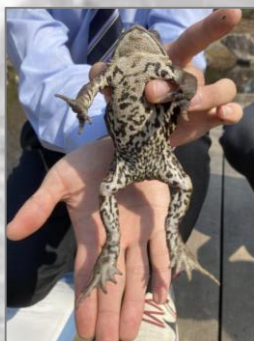
3月11日、2年生の授業で猿江公園の“春探し”をした。ちょうどテストでヒキガエルの行動に関して出題したので、カエルが見れたらいいなあと思っていた。ただ、残念ながら猿江のヒキガエルの繁殖期は1週間前の3月3日にピークを迎え、その後は急激に池で見られる個体数が減っていた。「先週だったらたくさんカエルを見られたんだけどね」と言うと、「今はどこにいるの?」「カエルって卵産んだら死ぬの?」という声があがる。カエルに対するみんなの認識が見えてきて面白い。ヒキガエルは、飼育下では10年ほど生きると言われていて、自然環境でも数年は生きる。だから寒い冬を越すし、今ちょうど冬眠から目覚めたわけだ。今姿は見えないけど、どこかに隠れているはず。例えば落ち葉の下とか岩の下とか。そう話すと、じゃあ隠れたカエルを探そうという流れになった。そう簡単には見つからないだろうな、と思って見ていたら、木の根元のあたりを掘っていたコウスケが「いた!」と言ってメスのヒキガエルを捕まえてきた。こういう時のみんなの生物探索能力は本当に凄い。よう見つけるなあ。というかよく素手で掘ったなあ…と感心してしまう。コウスケのおかげで、やっぱりヒキガエルは、日中は地面の隙間などに隠れていることが分かった。

ヒキガエルが登場したことによって観察が盛り上がる。「股に“付いてない”からこれはメスかな。」という声があがった。うーん…哺乳類とごっちゃになっているな。カエルは体外受精だから、オスでも外生殖器は無い。だから股をみても雌雄は分からない。(アフリカツメガエルの場合は発情期のメスの股に小さな突起ができる。大学時代はこれで雌雄を判別させられたが、結構難しかった記憶がある。)

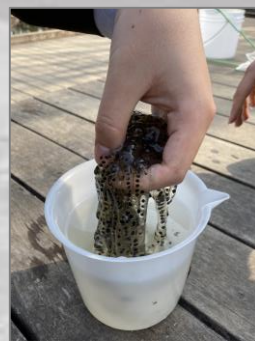
また、アマガエルぐらい小さいカエルだったら、「カワイイ」という意見の方が多いが(それでももちろん嫌がる人はいるが)、ヒキガエルのサイズになるとかなり意見が分かれる気がする。真っ先に掴んだり撫でたりして可愛がる派と、指一本触れるのにもビクビクする派、少し距離を置いて静観する派などだ。ちなみに、妻にカエルの話をしたとき、アマガエルの時は第一声が「持ちたい」だったが、ヒキガエルの時は「ちょっと怖い」だった。ユウキは最初触るのを相当ためらっていたが、次第に慣れてきたのか、通りがかりの保育園児にカエルを見せに行ったり、終いには自分でカエルを探しまわるようになっていた。(ちゃんと見つけていた。)



コウスケが掘ったカエルのねぐら 日中はこういう場所に潜んでいることが分かった。



ヒキガエルのお腹 模様は個体ごとに異なっていて、個体識別に使われることもあるんだとか。



カエルの卵をつかむルイ ここまでできるのは強者?! 勇気はあるが、触ってみることはとても大切。



孵化したおたまじゃくし 「発生」の授業で登場した“尾芽胚”だ。もうすぐ泳ぎだして餌を探しだす。



園児にカエルを見せるユウキ 保育園の先生のご指導が行き届いているのか、単に怖がっているのか、触ろうとする子は1人もいなかった。



鮮やかな“虹彩” 授業ではブタの眼の解剖をやったが、カエルの虹彩は哺乳類とは全く違う色と形をしている。



半透明の“瞬膜” カエルには下から閉じる半透明の瞬膜があり、水中などで閉じられる。ヒトには痕跡程度にしか無い。